

です。ですから1か月の平均気温、平均気圧の時系列を研究すれば何時寒くなるかが解ります*。1か月予報で更に重要視しているのは前年1年間の天候の経過をみて行くと、それによって予報の質はいちぢるしく向上します。

今まで申し上げたことは対流圏についてですが、最近ソ連でも成層圏のマクロプロセスの研究をする人達が増えて来ました。確かに数10kmの高層気流の研究によって天気変化の別な原因がわかって来ました。すでに太陽活動の微粒子放射によって天候が変ることが知られています。最近ソ連のパゾーロフがこの事に関して本を書いています。粒子放射のメカニズムは解かりませんが、天気に影響のあることははっきりしています。ソ連では1か月予報については予報根拠の経験確率を各地区から集めて、それを公表される予報の参考に使っています。

* 詳しい説明がなかった。

(文責北原英一、久保木光熙)

言葉や講演時間の制約のため充分に意をつくせませんがさらに詳しく知りたい方は次の二三の文献を御参考にして下さい。

参 考 文 献

- 1) 三友栄, 1957: 歴史的にみた各国長期予報の発展(2), 測候時報, Vol. 24, 2号 73—77
- 2) 倉嶋厚, 1956—1957: ソヴェート気象学の展望(7, 11), 測候時報, Vol. 23, 12号, Vol. 24, 4号
- 3) 須田健, 1959: ソ連邦の長期予報事業, 気象研究ノート, 10, 211—219.
特に最近の技術的な問題にまで詳細を紹介したものとして
- 4) 須田建, 1962: 外国における長期予報の現状, (I), 昭和36年度全国長期予報技術検討会資料, 気象庁予報部。

【口絵の説明】

茅ヶ崎の西方に見られた地形性の雲

7月22日(昭和39年)は晴天で朝から非常に湿った感じの強いSの風が吹いていた。おひるすぎ、何気なく屋上の展望台にのぼってみると、西の方の松並木の上に、いつもとはちがった異様な雲の一部が見えた。早速海岸に出て、砂丘にのぼって見ると、写真のような、なめらかな堤防状の雲が海岸から内陸に向かって発生しているのが見られた。

この雲は、湿度の高いSの風が、大磯(参考地図B)から国府津(参考地図C)にかけて海岸ぞいに発達した山地の斜面をのぼるときに発生した地形性の雲であろうと考えられる。参考地図Aは撮影地点。

筆者は茅ヶ崎に移住してから丸四年になるが、その間にこのような雲は一度も見たことがない。それで何か普通とはちがった気象状態によって生じたものと考えられる。

22日の天気図日記(天文と気象9月号)によると、「梅雨あける。本州南岸ぞいにあった前線は午後はぼけて、梅雨あけ。東京も8日ぶりに晴天がでて、最高は21°Cにあがった」

23日は「太平洋高気圧が強張りだしすっかり夏型、

今日は暦の上でも大暑、東京は朝から快晴の33.7°Cの暑さで、水キキンはいいよ深刻」

となっている。(伊藤洋三)

何か付言をということで書きだしてみたがペンがすべらない。みごとな写真を見ているだけで何時間も過ぎてしまった。魅力のある雲である。美しい雲である。まのあたりこういう雲に対面された伊藤洋三さんをうらやましいとも思う。なみなみならぬ精進と、すぐれた目と、技術の結晶であろう。すぐ上空層に積雲が点々としているから梅雨があけた空である。上層雲が広がっているのも梅雨のなごりらしい。問題の層積雲は国際雲図帳にconjoined orographic cloudとあるものと同種であろうとはいえるが、どうしてできたかとなるとはっきりしない。平塚、国府津間の海面に広がる湿潤な低い空気に原因があるのか、海岸近くまで近づいている丘陵の方に原因があるのか、国府津から小田原かすかに見える接地煙霧層がどういう役をするのかははっきりしない。やはり地形性層積雲というくらいしかいいようがない。それにしてもみごとな雲である。(伊東彌自)